

Book Review

GPのためのマイクロスコープを応用した ウルトラソニック インスツルメンテーション

阿部 修・大野純一・景山正登 著



Reviewer

長尾大輔 Daisuke Nagao

(茨城県ひたちなか市・長尾歯科)

A4 判変, 82 頁
オールカラー
定価 (本体 6,000 円+税)
医歯薬出版刊



おそらく本書は、マイクロスコープを用いた歯周治療について、エビデンススペースで示した初の一冊ではないだろうか。

今春開催された日本顕微鏡歯科学会での基調講演にて、日本におけるマイクロスコープの販売実績は、2017年3月現在、合計7,064台と、特にここ数年で急激に普及が進んでいるとの報告があった。これは、とりわけ有効とされるマイクロスコープを用いた歯内療法を、自身の日常臨床に取り入れたいとお考えの先生が多いことを表しているのではないだろうか。

われわれGPの毎日を振り返ってみると、歯内療法はもちろんであるが、齶蝕、歯周病、補綴、抜歯等々、多岐に渡る。私はこれら身近な症例に対して、事実を的確に把握し、裸眼とは別次元での処置を高精度に提供するため、日々マイクロスコープ下で歯科医療を提供している。

なかでも歯周治療は、歯科治療を成功に導くためには決して欠かせない。そのため、当院では歯科衛生士が初期

治療やメンテナンスに、歯科医師は歯周外科にマイクロスコープを用いており、中等度以上の歯周治療においても、低侵襲でありながら良好な結果を出すことができている (Nagao D. Review of minimally invasive periodontal surgery using a dental microscope. Int J Microdent. 2015 ; 6 (1) : 6-21)。

それだけに本書を読みきったとき、私はとても心が踊った。特に本文中の「筆者はマイクロスコープを応用するようになり、それまでは当たり前のように行い、当然できていると思い行ってきた齶蝕処置や歯内療法が、思いのほかできていなかったことに気づかされた。そのようななか、歯周療法においても同様に、日々インスツルメンテーションは本当にできているのか？ 歯石やプラークは本当に除去できているのか？ ということを自問し、その質をマイクロスコープで確認するようになっている。いままでできていると信じて行ってきた従来手技で、本当に目標とする状態になっているのか、その

質をマイクロスコープ下で確認することこそが、自分の本当の技術や癖について知ることとなり、それがスキルアップに直結すると確信している」という、常にマイクロスコープ下で診療を行っていないければ、決して感じ得ない思いをそのまま表した文章に、私はとても強いシンパシーを感じた。

近年、マイクロスコープはたしかに普及しているが、「操作の困難さから、実は設置以来ほとんど使っていない」や「歯内療法以外には使わない」等、日常臨床で幅広く活用できていないという声を耳にすることも多い。そのような先生はもちろん、現在、マイクロスコープをおもちでない先生にも、ぜひとも本書をお読みいただきたい。

マイクロスコープを用いた非外科的歯周治療を中心に、インスツルメンテーション、ポジショニング、歯周外科時の活用法に至るまで、多くの写真でわかりやすく解説されているので、臨床の幅を大きく広げてくれる一冊になることは間違いない。